日本建築学会大会学術講演梗概集
（北海道） 2022 年 9 月

明治 30 年代から大正初期の台湾花蓮溪流域における製糖業と土地の開発

正会員　○辻原　万規彦*

台湾総督府文書　台湾百年歴史地図　台湾日日新報
賀田金三郎　台東拓殖製糖　塩水港製糖拓殖

１．はじめに

筆者らはこれまで，台湾の大規模河川の流域をまとまった一つの領域と捉え[1)]，日本統治期の主力産業であった製糖業によって，これらの領域が如何に変容したかについて検討してきた[2)]。続く本稿では，明治 30 年代から大正初期における台湾東部の花蓮溪の流域を対象とする。

台湾東部では 3000m 級の中央山脈と 1000m 級の海岸山脈に挟まれた幅数 km の平原である花東縦谷が南北に延びる。花東縦谷の大規模河川には北側の花蓮平原に続く花蓮溪，海岸山脈を横切る秀姑巒溪，南側の台東平原に続く卑南溪がある。このうち，花蓮溪と支流の木瓜溪，寿豊溪，萬里溪，馬太鞍溪などの流域が対象である。この領域における日本統治期の開発については既往研究[3)]が少ない中でも，官営移民村の影響が取り上げられてきた[4)]。しかし，領域全体を視野に入れた研究はほとんどない。

国史館台湾文献館文献檔案査詢系統で閲覧できる各種の台湾総督府文書，中央研究院地理資訊科学研究専題中心が運営する台湾百年歴史地図に収録された各種地図，台湾日日新報の新聞記事，糖業協会所蔵の糖務年報，国立台湾図書館日治時期図書影像系統で閲覧できる日本統治期の各種文献などを用いて検討を行った。また，2009 年 9 月から 2019 年 6 月の間に断続的に現地調査を行った。

２．賀田組による開発（明治 43 年頃まで，図１）

日本統治期の花蓮溪流域の地域開発は明治 32（1899）年 11 月に賀田金三郎（賀田組）に対して加禮宛原野と馬里勿原野の広大な官有地の予約売渡が許可されたことに始まる。広大な範囲であったためか，当初は土地の開墾が上手く進まなかった。明治 36（1903）年 4 月に馬里勿原野の一部である吳全城原野を甘蔗栽培のために無償貸付に変更して製糖工場を建設し，明治 38 年に製糖を開始した。さらに，原料採取区域[5)]が設定され，花蓮港と吳全城の間で手押し台車軌道の営業が始まった。また，明治 43（1910）年 2 月に官営移民村（吉野村）が開設された。花蓮溪下流域の地域開発が漸く本格化したといえる。

３．改良糖廓の建設による開発（大正２年頃まで，図２）

明治 43（1910）年 7 月に荒井泰治らによって台東拓殖合資会社が設立され，花蓮港庁下の賀田組の事業を引き継いだ。台東拓殖は荳蘭社と豊田村に改良糖廓を建設して原料採取区域を拡大し，土地の開墾を進めた。一方，広大な馬里勿原野の一部は返地され，大正 2（1913）年 4 月には官営移民村（豊田村）が開設された。民間の製糖会社による改良糖廓の建設と官営による移民村の開設の両面から地域の開発が進められたといえる。

なお，台東拓殖合資会社は明治 45 年 12 月に台東拓殖製糖株式会社に合併された。また，花蓮港庁の南部の秀姑巒溪の流域では大正 2 年 8 月に二ヵ所の改良糖廓（針塱，公埔）が建設され，原料採取区域も設定された。

４．大規模な新式工場への移行期（大正３年頃，図３）

大正元（1912）年 9 月に台東拓殖製糖に対して大正 2 年期（大正元年 11 月～翌年 10 月）作付から有効な原料採取区域が設定された。広大な区域内の鯉魚尾に新式工場が建設されて大正 2 年 12 月に製糖を開始した。台東拓殖製糖は大正 3 年 7 月に塩水港製糖（後の四大製糖会社の一つ，合併によって塩水港製糖拓殖に改称）に合併された。

花蓮溪流域では新式工場の建設によって原料の甘蔗が多量に必要となり，土地の開墾の進度があがった。一方，花蓮庁下南部の秀姑巒溪流域では，さらに璞石閣に改良糖廓が建設された。小規模な改良糖廓の建設を段階的に進めることで，徐々に甘蔗の栽培地を広げたといえる。

５．おわりに

台湾東部の花蓮溪流域では，台湾西部と同様に製糖会社に対する原料採取区域が設定されただけではなく，あわせて官有地の払い下げと官営移民村を建設することによって地域の開発が進められた。このような組み合わせは，台湾の他の地域ではあまりみられない手法であった。

謝辞　本稿は JSPS 科研費 JP21K04456，JP17K06754，JP26420647，JP23560769，JP20760430 ならびに JP15H04109，2013 年度台湾奨助金の助成を受けた成果の一部である。資料の閲覧では，中央研究院人文社會科學研究中心地理資訊科學研究專題中心の廖泫銘 研究副技師，公益社団法人糖業協会，熊本県立大学図書館にお世話になった。記して謝意を表す。

注

1）平成 27～31 年度科学研究費補助金（基盤研究（B），課題番号 15H04109）「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」（研究代表者・青井哲人（明治大学教授））による。

2）辻原：明治 40 年代から大正期の台湾卑南溪流域における製糖業が地域開発に与えた影響，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.1023-1030，2021。辻原ほか：原料採取区域の変遷からみた日本統治期初期の台湾濁水溪流域における地域開発の進行，建築学会論文集，792 号，pp.464-475，2022。辻原ほか：明治期台湾における糖業政策が地域の再編成に与えた影響−台湾南部の鳳山庁，蕃薯藔庁，阿緱庁を対象に−，建築学会論文集，797 号，印刷中，2022。

3）例えば，山口政治：知られざる東台湾，展転社，2007

4）例えば，山元貴継：日本統治時代の台湾東部における日本人移民村の集落構造とその変化，人文地理，72 巻，4 号，pp.337-359，2020

5）区域内で栽培，収穫された甘蔗は定められた製糖工場に搬入しなければならない制度。なお，全ての工程で機械を用いる新式工場では分蜜糖が製造されるが，圧搾工程のみに機械を用いる改良糖廓では含蜜糖が製造される。

Relationship of Sugar Refinery Industry and Land Development on the Hualien River Basin in Taiwan between the 1900s and 1910s

TSUJIHARA Makihiko

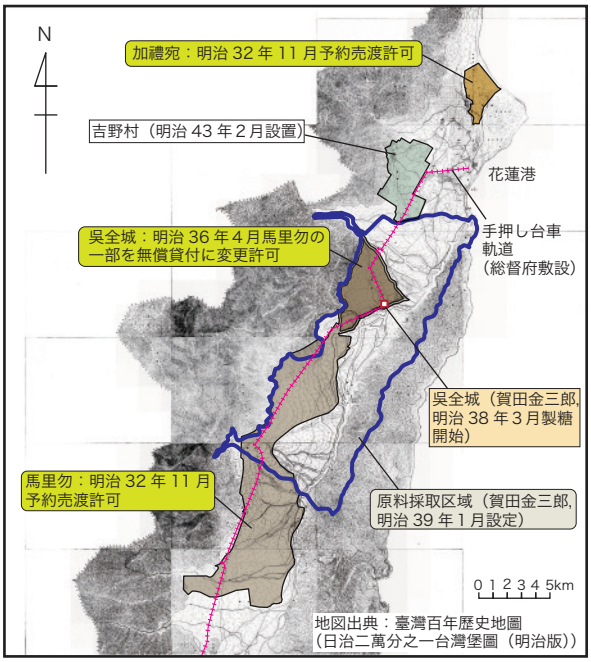

図１　明治 43 年９月頃における花蓮の地域開発

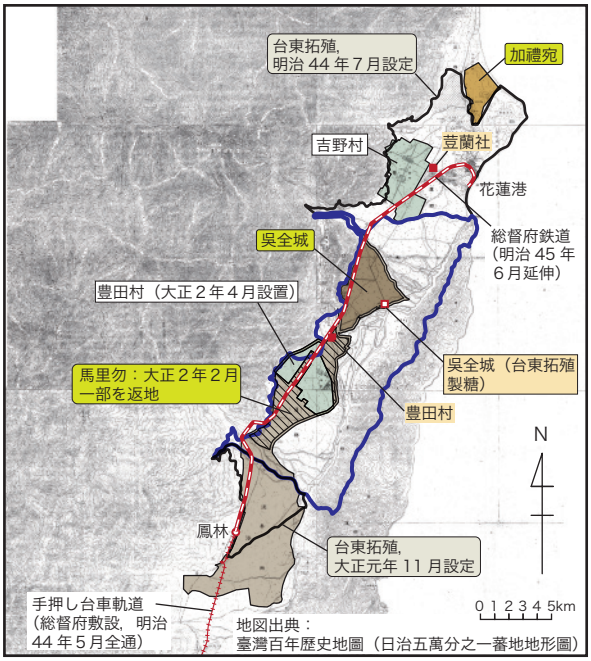

図２　大正２年８月頃における花蓮の地域開発

共通事項

凡例

- 売渡官有地
- 移民村
- 原料採取区域
- 新式製糖工場
- 改良糖廊
- 総督府鉄道（縦貫鉄道）
- 手押し台車軌道
- 河川
- 主要な都市や集落
- 新式製糖工場

参考文献：

國史館臺灣文獻館所蔵の台湾総督府文書（件典藏號：00010957008, 00002085008, 00002556a04, 00006214007, 00002713006, 00002720004, 00002720005, 00002850008, 00002872004, 00003023004, 00003167002, 00003167004, 00007210020, 00003900002（年代順）ほか），台湾総督府鉄道部年報の各年度版，臨時台湾糖務局年報の各年度版，台湾総督府殖産局糖務年報の各年度版ほか

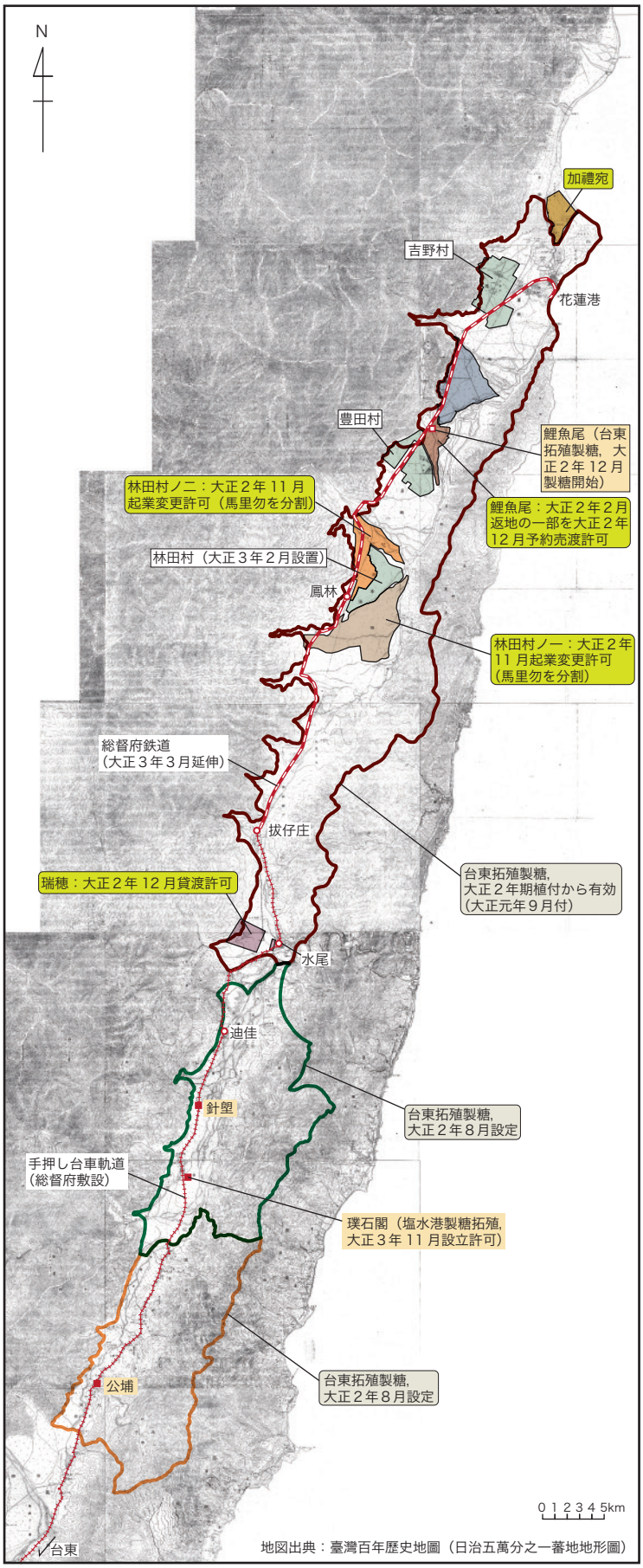

図３　大正３年 11 月頃における花蓮の地域開発

＊熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻　教授・博士（工学）　＊ Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.